

2022 年度

梅光学院中学校・高等学校  
学校評価書

梅光学院中学校・高等学校

# 2022年度 梅光学院中学校・高等学校 学校評価書 校長(樋口 紀子)

## 1 学校教育目標

### \* 学校目標

Beyond the Borders 「自分を越える・国境を越える」

### \* 生徒目標

学び・経験・奉仕

- ・「学び」: 授業、学校行事、課外授業、課外活動、留学、ボランティアなどあらゆる機会を用いて生徒は学びます。
- ・「経験」: 体験したことを言語化して、他者に伝え、他者からフィードバックを得ることによって「経験」へと昇華する。
- ・「奉仕」: 学んだ知識、技術、能力を他者のために用いる。

2018年度に掲げた教育目標を継続して定め、これに従って教育を行っていく。

## 2 現状分析

- ・学び: ICTを活用することによって主体的な学びをスライドや動画で発表することができるようになった。生徒のICT活用術は年々向上しており、目を見張るものがある。特に、マッケンジー杯では、中1～高IIまでSDGsについてICTを活用しながら英語で発表をすることが定着してきたことも評価すべきことである。
- ・経験: 「Wake-Up全員留学」プログラムを開始して5年目。「新型コロナウイルス感染症」感染拡大の影響で、中学も高校も「Wake-Up全員留学」を実施することができなかったが、フィリピンが春に国を開け、外国人を受け入れることとなったため、高校3年生のみ期間を2週間に短縮して6月中旬～7月初旬にかけて実施した。高校1、2年生は翌年の1月末～2月初旬に2週間、2学年同時開催でフィリピンで実施。中学生はカナダからシンガポールと国を変え、期間も1週間に短縮して実施。国を変更したり期間を短縮したのは燃油料の高騰により航空運賃が高くなったことと、急激な円安で留学費用が高騰したためである。また、オーストラリアを始めとして、アメリカ(ディズニーワールド)、オーストリア(音楽)、韓国等の研修旅行等も昨年度同様、まったく実施できなかったが、ニュージーランド中長期留学が再開し、4名の生徒を送ることができた。加えて、高大連携の一環として実施している高2の「課題探究」はそれぞれの研究テーマに即して、大学の先生に師事することによって良い学びの機会となっている。3月に行われた論文発表会では、多種多様な分野の研究が発表され、今後の学びの動機付け、将来の進路の動機付けともなるものであった。
- ・奉仕: 「新型コロナウイルス感染症」のために、学外に出るボランティア活動に限界はあったが、生徒会が収穫感謝記念礼拝を通して子ども食堂に食品を届けたり、「サービス・ラーニング」という新しい授業を通して、海岸清掃を行ったりすることができた。サマリア・デー献金の中の試みである「サマリア・カジュアルデー」も定着し、途上国の子どもの教育支援に資している。一昨年度から生徒会を中心に、校則を自分たちで考えるたり、行事を考えたりする試みは継続され、生徒主体の学校づくりが定着してきたと思う。

## 3 本年度重点を置いて目指す成果・特色、取り組むべき課題

- ・学び: 英語のプレゼンテーションコンテスト、「マッケンジー杯」でSDGsに関連する英語のスピーチを中高生が実施したことは素晴らしかった。そこで提案されたことを日常の授業や行事等で連携し、実際の活動にしていくことが今後の課題である。
- ・経験: 「Wake-Up全員留学」やニュージーランド中長期留学も3年ぶりに実施できたが、他の留学や研修等が実施できなかったため、来年度の実施に期待したい。
- ・奉仕: 「サービス・ラーニング」を定着させ、もっと学外に出て社会問題を生徒の目で見、それをボランティア活動につないでいく必要があると思う。

#### 4 学校評価総括(取組の成果と課題)

・学び:

①ICT教育-音声ソフト等、新しく出ているソフトを使用しながら、生徒の自主的な学びのために、さらに運用方法について検討が必要である。

②進路指導-中1～高3まで定期的に進路検討会が実施され、早い段階から生徒の希望が把握できつつある。ただし、高3生の中には一部自分の家庭の状況、成績、得意分野等をしっかり把握できない生徒がおり、進路とミスマッチを起こしている場合がある。その指導をどのようにするかが課題である。

・経験:

①Wake-Up全員留学-「新型コロナウイルス感染症」感染拡大により、3年間できなかったものがやっと実施できたが、費用が高騰しているため、期間を短縮したり、国を変更したりしている。これを少なくとも当初の期間に戻す必要があると思う。

②各種留学-ニュージーランド留学は実施できたが他の留学はできなかったため、来年度は実施できるものからすることによってコロナ前の状態を取り戻す必要があると思う。

③高大連携事業-高Ⅱの「課題探究」は主体的な学びとして有効であると思われるので、今後も大切なプログラムとして継続していきたいと思う。

・奉仕:

①ボランティア活動-「サービスマーケティング」をより充実させる必要がある。

②サマリア・デー-月々のサマリアデー献金活動やサマリア・カジュアルデー活動は通常通り実施できたため、来年度もこの活動がより活発になるように実施していく必要がある。加えて、来年度は大学生と共に、支援地に訪れる「海外ボランティア実習」を実施したいと思う。

#### 5 次年度への改善策

・学び:ICTの活用に関しては、高等教育での学びを視野に入れ、iPadの活用の中に、キーボードの活用を加えていきたいと思う。また、ICTの研修会に教員だけではなく生徒を加えたことがICTの活用の充実につながったため、来年度も生徒も交えての研修会を実施したいと思っている。

・経験:「Wake-Up全員留学」を実施するだけでなく、コロナ前に実施していた留学や研修の復活、及び新しい海外への留学・研修等を開発、実施することできればと思う。

・奉仕:「サービスマーケティング」の拡大と、支援地を訪れる「海外ボランティア実習」を大学生と共に実施できれば、「サマリアデー」に対する理解と関心が深まると思われる。

梅光学院中学校・高等学校 部門評価シート 2022年度（分掌）

\*達成度は4段階で評価します

学校評価における部門評価								
分掌名		重点目標	具体的方策	達成基準	最終評価	達成度	達成状況の診断・分析	責任者
教務部	①	授業の実質化（授業時数の確保）	○行事の精選 ○単元別テストによる授業回数の確保 ○オンラインテストの開発と実施	A 目標の80パーセント以上を実行できている。 B 目標に見合う成果を60パーセント以上を実行できている。 C B未満	新型コロナウイルス感染症や悪天候等の影響で、年度当初予定されていた行事予定の変更があったものの、徐々に従来の学校生活に戻ることができている。 オンラインテストの開発と実施については、今年度も課題が見られ、試行錯誤中であった。	B	年間行事予定について、年度途中での変更が多く、次年度行事予定を作成するにあたり検討の余地があったものがあった。 必要がある場合は、オンライン授業に切り替え、授業日数の確保に努めることができた。	只木徹
	②	学校行事や時間割などを適切に計画し、また、教材備品等の環境を整える。	○授業に支障のないように、時間変更や教材の発注を行う。 ○時間割編成時、完成時に必修科目を確認する。	A 目標の80パーセント以上を実行できている。 B 目標に見合う成果を60パーセント以上を実行できている。 C B未満	授業変更等は各教科の協力を得ることができ、問題なく変更を処理できた。教材の発注も適宜行った。 時間割作成後必修科目のチェックを行うことができた。	A	授業変更や行事変更は多くあったが、教科主任と連携を図り、授業に支障の無いよう努めた。 年度途中に行事変更がある場合、出来る限り成績締日直前に入れないように努めるとよい。 授業備品等、学習環境の充実を目指した。	
	③	学籍・成績管理に関する事務処理を迅速に行う。	○生徒の異動が起きた際、転入試験の準備、退学関係書類の作成など、迅速に事務処理を行う。 ○新教務システムBLEND本格運用開始に際して、日々の出欠席を週担任と教務部でダブルチェックする仕組みを確立する。	A 目標の80パーセント以上を実行できている。 B 目標に見合う成果を60パーセント以上を実行できている。 C B未満	転入試験に適切に対応して処理できた。 退学や転出事務も適切に迅速に行えた。 今年度よりBLENDが本格導入され、適宜本校の状況に合うよう設定を整えた。出席簿のダブルチェックに関しては、徹底することができなかった。	B	新教務システムについて、本校での運用において対応・改善が必要な場面が多く、校内の動き出しまでに時間を要することがあった。 今後は、出席簿の入力を円滑に確実に行うことができるような仕組みづくりが必要である。	

梅光学院中学校・高等学校 部門評価シート 2022年度（分掌）

\*達成度は4段階で評価します

学校評価における部門評価								
分掌名		重点目標	具体的方策	達成基準	最終評価	達成度	達成状況の診断・分析	責任者
生徒支援部	①	自主的に学校生活を送るよう支援する	○円滑な生徒会・委員会活動のために助言・サポートを行う。 ○円滑な生徒会・委員会活動のために教員間で情報を共有する。	A 目標の80パーセント以上を実行できている。 B 目標に見合う成果を60パーセント以上を実行できている。 C B未満	情報共有を適宜行いながら、生徒会・委員会活動のサポートができた。 世代交代も円滑に行うことができた。	B	行事の始動が少し遅いところもあり、準備の段取りがうまく進んでいないことがあるので、来年度は先を見越し計画的に行事運営ができるように支援したい。	只木徹
	②	発達障害等に関して全教職員で情報を素早く共有し健やかな発達を促す	○毎日朝と放課後に全教員で情報共有のための会合を行う ○毎週職員会議を行い関係の情報を共有する ○毎週非常勤講師を含めて研修会を開催し、関係の情報を共有する	A 目標の80パーセント以上を実行できている。 B 目標に見合う成果を60パーセント以上を実行できている。 C B未満	情報共有の機会を数多く設けたことや、Teams・Box・BLENDを利用して記録に残したことで情報の共有ができた。	A	スクールカウンセラーとの連携を行うことで、要支援生徒への支援を行うことができた。	
	③	問題行動に関して全校で情報を素早く共有して生徒の健やかな発達を促す	○毎日朝と放課後に全教員で情報共有のための会合を行う。 ○毎週職員会議を行い関係の情報を共有する。 ○毎週非常勤講師を含めて研修会を開催し、関係の情報を共有する。	A 目標の80パーセント以上を実行できている。 B 目標に見合う成果を60パーセント以上を実行できている。 C B未満	情報共有の機会を数多く設けたことや、Teams・Box・BLENDを利用して記録に残したことで情報の共有ができた。	A	Hyper-QUを利用して生徒やクラスの実態を把握する機会を設けることで、教職員の主観だけでなく外部機関の客観的な目線も取り入れ広い視野でとらえることができた。	

梅光学院中学校・高等学校 部門評価シート 2022年度（分掌）

\*達成度は4段階で評価します

学校評価における部門評価								
分掌名	重点目標	具体的方策	達成基準	最終評価	達成度	達成状況の診断・分析	責任者	
進路指導部	① 高III生徒の希望進路実現を支援する。	○高III生徒が進路志望を固め、希望進路に進めるように支援する。 ○支援方法は、高III生対象の進路相談、課外授業、個別指導、小論文指導、面接・プレゼン指導等による。 ○FINE SYSTEM、Compass、K-Navi等の効果的な活用を検討し、生徒保護者に適切な情報を提供する。	A 目標の80パーセント以上を実行できている。 B 目標に見合う成果を60パーセント以上を実行できている。 C B未満	高III生徒が掲げる第一志望の上級学校に概ね導くことができた。進路相談・個別指導・小論・面接など、指導者や指導日等を廊下に掲示し、全体に見える化したことで、生徒たちの進学意識を向上させることができた。 また、共通テスト後の出願指導において、各業者のデータに基づいて出願指導がなされた。	A	生徒の希望進路をおおむね達成することはでき、様々な受験に対して個に対応できた点は大変よかった。一方、第一志望目標自体の目標設定が生徒の能力に対して低い傾向がある。Beyond the Bordersを体現するような生徒をさらに増やしていく取り組みが必要。	重村雄太	
	② 生徒の進路実現のために進路検討会を定期的実施し、全教員で生徒を支援する体制づくりをする。	○進路検討会を各学年学期に最低2回実施する（3学期は1回の年間5回） ○進路検討会の結果に基づき、担任はクラスの教科担当に注力すべき生徒やクラスの現状を伝え、成績向上のための指導を実施してもらう。 ○中学から高校までの6年間の進路指導計画を作成、または実施の協力をする。	A 目標の80パーセント以上を実行できている。 B 目標に見合う成果を60パーセント以上を実行できている。 C B未満	高IIIの進路検討会はほぼ予定通りに実施することができた。 高I・IIに関しては十分にやりきれなかった。ただし、全員担任制で教員間の連携がとれていることもあり、小論・面接などの個別指導に関しては徹底して準備することができた。また、6年間の進路指導計画を完成させることができ、次年度から新計画に沿って進めることができる。	B	高I・IIの進路検討会に関して、他の研修や高III優先になってしまうことがあったことが反省点である。次年度は計画通り遂行していけるように進路指導部が舵取りをして実施していく必要がある。 進路指導計画に関しては毎年改善を重ね部内で共有がなされている。		
	③ 大学等連携やキャリア教育推進により、生徒の進路意識と学力向上のための環境整備を行う。	○生徒が主体的に進むべき進路について深く考えられるための進路ガイダンス、講演会等を実施し、生徒の進路意識向上を実現する。 ○年間の進路ガイダンス、講演会、研修会、自習室、進路資料室の整備をする。 ○進路関係の環境を整備し、学校全体が勉強をする雰囲気になるよう協力する。 ○夏期課外や個別指導を実施し、学力向上に効果的な指導を行う。	A 目標の80パーセント以上を実行できている。 B 目標に見合う成果を60パーセント以上を実行できている。 C B未満	進路ガイダンス、講演などを定期的開催し、進路に関する情報を提供することができた。年間の進路ガイダンスなどの整理は1年間けて終了し、次年度に反映予定である。環境整備については書類のデータ化もすすみ、整理整頓がなされ使いやすい状況になっている。 夏期課外や個別指導に関して、実施はしたが成果を判断しづらい。終了後のアンケートを実施するなどして成果の検証を今後行う必要がある。	B	キャリア教育は大学連携卒業研究プログラムを軸に置き、安定している。また、ガイダンスも例年業者選定も行っていることもあり、毎年質の向上が見られる。 夏期課外については実施はしたが、成果や生徒保護者の感想や意見を集約できていないので今後は集約できるようにしたい。		

梅光学院中学校・高等学校 部門評価シート 2022年度（分掌）

\*達成度は4段階で評価します

学校評価における部門評価								
分掌名	重点目標	具体的方策	達成基準	最終評価	達成度	達成状況の診断・分析	責任者	
宗教部	① ミッションスクールに導かれたことにより、福音を聞き、神の言葉を聞く機会を得る	○毎日の朝の礼拝に出席する ○特別チャペル(春季・秋季修養会) ○教職員 聖書研究会 ○宗教委員(生徒)の充実 ○保護者へのアプローチ	A 目標の80パーセント以上を実行できている。 B 目標に見合う成果を60パーセント以上を実行できている。 C B未滿	コロナ禍においてマスクは取ることは出来なかったが、通常通り、毎日礼拝することが出来た。悪天候の日であっても、オンライン礼拝を実施することが出来た。生徒も時々、クラス礼拝やリトリートの様子を全体の礼拝でシェアすることがあり、音楽科も賛美リードに積極的に関わり礼拝を豊かにしてくれている。昨年度の課題として、教職員の学びと保護者へのアプローチの2点を上げていたが、教員に聖書研究会を実施し、また保護者の聖書の学び会と、礼拝のライブまたアーカイブ配信を行うことが出来、改善されたと考える。	A	聖書の学び会を、生徒が授業外においても、また保護者へももっと機会を増やしたい。	後藤 献一	
	② キリスト教やミッションスクールの豊かな文化、行事、伝統を体験する	○入学礼拝、卒業礼拝 ○始業礼拝、終業礼拝 ○イースター ○クリスマス礼拝 ○BCC (月一度の梅光コミュニティチャペル) ○夏と春のバイブルキャンプ/リトリート	A 目標の80パーセント以上を実行できている。 B 目標に見合う成果を60パーセント以上を実行できている。 C B未滿	多くの生徒たちがクリスマスキャストに自主的に参加し、素晴らしいクリスマス礼拝を持つことが出来た。開学150周年記念礼拝や収穫感謝礼拝に生徒たちは主体的に参加し取り組むことが出来た。卒業礼拝も、中学・高校ともオリジナルであり、その年にしか観れない卒業礼拝をしてきている。夏と春のバイブルリトリートも開催され、毎回素晴らしいゲストが梅光に来て下さり、休みの期間も福音に与る機会が提供されている。	A	コロナ収束と共に、BCCやクリスマス礼拝、リトリートには、保護者への参加も促していきたい。		
	③ キリスト教精神・隣人愛を実践する	○サマリアカジュアルデー募金を通して、里親スポンサーを啓蒙し、貧困にある子どもたちや地域を支援する ○施設を訪問し、愛を表す ○ボランティア活動をする	A 目標の80パーセント以上を実行できている。 B 目標に見合う成果を60パーセント以上を実行できている。 C B未滿	サマリアカジュアルデーを継続し、4人のチャイルドスポンサーになっている。月に一度のこの日は、200円を募金したら私服を来て投稿して良いが、参加者数が減ってきている。収穫感謝礼拝で食物を集め、子ども食堂に届けた。今年度から、高川で「サービスマーケティング」の「奉仕しながら学ぶ」授業が始まり、地域貢献できるボランティア活動を拡げている。	B	コロナ禍で施設訪問が出来なくなっているが、また試みていきたい。新しいボランティア活動を開拓し、生徒たちに機会を提供したい。		

梅光学院中学校・高等学校 部門評価シート 2022年度（分掌）

\*達成度は4段階で評価します

学校評価における部門評価								
分掌名	重点目標	具体的方策	達成基準	最終評価	達成度	達成状況の診断・分析	責任者	
ICT教育推進部	① 生徒がICT機器を通じて「主体性」「協働性」「創造性」を身につけ、ICTを使いこなす態度を養う。	○生徒が主体的にICTを活用して学校生活・行事等をよりよいものにするようサポートを行う。 ○生徒が協働してICTを活用し、学校に付加価値を与えるものを作るためのサポートを行う。（ICT委員会の運営等）	A 目標の80パーセント以上を実行できている。 B 目標に見合う成果を60パーセント以上を実行できている。 C B未満	OSや教員対象学校説明会では、生徒が学校生活に関するプレゼンテーションを積極的に行ってくれる場面が多く、これまで以上にICTを活用する機会が増えた。 またグループワークにおいてもICTを活用しながら自分たちの考えをまとめ表現する場面も多く見られた。	A	最終評価に同じ	川口駿純	
	② ICTを用いた授業の導入・定着と授業外でのICT活用の促進	○教員の授業へのICT導入サポート、研修の実施と次年度に向けたICT研修の考案 ○学校行事、部活動での活用イベントの企画	A 目標の80パーセント以上を実行できている。 B 目標に見合う成果を60パーセント以上を実行できている。 C B未満	常勤・非常勤問わず多くの授業でICTを用いた授業を実践することができた。 その一方ICT教育を推進できる機器・ツールの開拓が今年度行うことができなかった。 今年度は外部講師を招きICTワークショップを2度実現することができた。なかでも2度目は全校生徒と取り組む機会を設けることができ、全校がICTスキル向上に向け取り組む機会を設けることができた。	B	ロイロノートやTeamsなどは基本的な操作方法を身につけることができおり、今年度も必要に応じて即時双方向型のオンライン授業に切り替え、授業運営をすることができた。 しかしICT機器・ツールの応用やICT教育を推進することを実現することができなかった。 より一層生徒が「主体性」「協働性」「創造性」を身につけられるよう来年は計画的に取り組んでいきたい。		
	③ 校内ICT環境の維持・整備	○教室内のICT機器、教職員の使用する機器の管理、メンテナンス ○生徒・保護者の質問対応及び、ICTに関するトラブル対応と担当業務の確実な遂行	A 目標の80パーセント以上を実行できている。 B 目標に見合う成果を60パーセント以上を実行できている。 C B未満	ICT機器の設置・メンテナンスは適宜行うことができた一方、機器の管理の改善が必要と実感する場面が多かった。生徒・教職員への貸し出しのルールを徹底を改めて見直す必要がある。 今年度からBLENDなど新しいツールを導入したが、生徒・保護者からの質問に適切な対応をすることができた。	B	ICT機器の在庫管理・貸し出しに関して従来ルールを見直し改善をしたものの、かえって教員への負担が大きくなってしまった結果になってしまった。 今年度の反省を受け、必要な箇所は改善を行いICT機器の管理を行っていききたい。		



梅光学院中学校・高等学校 部門評価シート 2022年度（教科）

学校評価における部門評価

教科	重点目標	具体的方策	達成基準	最終評価	達成度	達成状況の診断・分析	責任者
国語	① 言葉によって見方・考え方を深める	<p>○1年を通じてさまざまな作品に取り組み、言葉を通じてさまざまな価値観に触れる。</p> <p>○ものの見方・考え方を言葉から読み取り、創造的・論理的に思考する力を養う。</p> <p>○言葉によって物事を深く、広く、豊かに感じ取りかつ味わうことのできる能力を身につけ、生涯にわたり国語を尊重し、能力の向上を図る態度を養う。</p>	<p>A…80%以上の生徒が目標を達成できている</p> <p>B…60%以上の生徒が目標を達成できている</p> <p>C…50%以上の生徒が目標を達成できている</p>	<p>作品を通じ多様な価値観を学ぶことができただけでなく、作品を通じて抱いた自分の考えを自分の言葉で表現する力を身につけることもできた。</p> <p>またさまざまなテーマの作品に触れることにより、知見・視野を広げることができた。</p>	A	<p>さまざまなテーマに触れることができただけでなく、各テーマとも難易順に作品が配置されているため、習熟度に合わせた作品を選択することができたことにより、生徒の主体性が多く見られた。</p> <p>また作品を論理的に読み取ることで、自分の考えを表現する際にその力を応用することができた。</p>	川口駿純
	② 適切な言語能力の育成	<p>○相手に応じて言葉を使い分けながら、自分のものの見方・考え方を伝える力を養う。</p> <p>○古典を通じて言葉の歴史・変遷を学び、言葉の持つ価値を認識し、国語に関心を持つ。</p> <p>○ICTを活用し、言語能力を高める意識を身につける。</p>	<p>A…80%以上の生徒が目標を達成できている</p> <p>B…60%以上の生徒が目標を達成できている</p> <p>C…50%以上の生徒が目標を達成できている</p>	<p>作品を通じて抱いた自分の考えを他者へ共有することにより、適切な言語能力を身につけることができた。</p> <p>また古典作品を通じ、日本語や漢字の歴史に触れることができた。</p> <p>さらにICT機器を使用し、自身やグループの考えをプレゼンテーションや動画作成などといった手段で表現することもできた。</p>	B	<p>日本語や漢字などの言葉が持つ「意味・力」を学ぶことができた一方、現代の言葉と比較するところまでは及ばなかった。</p> <p>またICT機器を用いての表現力や言語能力育成に関しては全学年が取り組むことができなかった。</p>	

梅光学院中学校・高等学校 部門評価シート 2022年度（教科）

学校評価における部門評価

教科		重点目標	具体的方策	達成基準	最終評価	達成度	達成状況の診断・分析	責任者
社会	①	基礎学力を育み、学習意欲を高める	<ul style="list-style-type: none"> <li>○単元別テスト等を通じて生徒の理解度を把握しながら、学習意欲を高めるように授業を工夫する。</li> <li>○適切な量のホームワークを課し、家庭学習の姿勢を育む。</li> <li>○多彩な資料を準備しICTをフル活用して、教科への興味関心を呼び起こす。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>A…80%以上の生徒が目標を達成できている</li> <li>B…60%以上の生徒が目標を達成できている</li> <li>C…50%以上の生徒が目標を達成できている</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○単元別テストや小テストを用いて、生徒の学習状況を把握し、授業改善に努めた。</li> <li>○テストに向け、適宜課題を課した。自学の習慣をより身につけることができれば、更なる成長が期待される。</li> <li>○全科目において、ICTを活用し、生徒の能動的な授業参加を促した。</li> </ul>	B	<p>単元別テストまでの学習計画を立て、日々自学に取り組む習慣を身につけられるような取り組みが不足していた。</p> <p>ICTなどを活用し、教科科目への興味関心を持ってもらえるよう努めたが、基礎学力の定着については課題が見られる。</p>	広木光
	②	過去や現代の社会問題に関して理解・関心を深め、自分の考えをアウトプットする	<ul style="list-style-type: none"> <li>○各単元に関連する社会問題を提示する。</li> <li>○生徒の社会問題についての疑問や関心事項を、単元内の学習内容に結びつける。</li> <li>○生徒がアウトプットをする機会を増やす。</li> <li>○発表前後の意見交換を通じて、より相手に伝わりやすい表現を模索できるよう支援する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>A…80%以上の生徒が目標を達成できている</li> <li>B…60%以上の生徒が目標を達成できている</li> <li>C…50%以上の生徒が目標を達成できている</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○各単元に関連する社会問題を提示するよう努めた。</li> <li>○探究科目では、生徒の社会問題についての疑問や関心事項を学習内容に結びつけることができた。</li> <li>○探究科目においては、生徒のアウトプットの機会を多く持つことができた。</li> <li>○発表をする際には、生徒同士が意見交換を通じて、よりよい表現を模索できるよう促した。</li> </ul>	A	<p>現代社会における問題と生徒が学習している内容はどのように関連しているかについて留意した授業づくりをおこなった。</p> <p>生徒自身が、社会問題への理解と解決策の模索ができるよう促し、生徒間で共有する活動を通して、表現力向上もはかった。</p>	

梅光学院中学校・高等学校 部門評価シート 2022年度（教科）

学校評価における部門評価

教科	重点目標	具体的方策	達成基準	最終評価	達成度	達成状況の診断・分析	責任者
数学	① 分かる授業の展開	<p>○小テストなどを実施して生徒の理解度を把握しながら、理解度を高めるように授業を工夫する。</p> <p>○教科への興味関心を呼び起こすため、タブレットなどICT機器を活用し、グラフ作成ソフトなどを通じて視覚的に理解を深められるように工夫する。</p> <p>○生徒の主体的・対話的な深い学びの実現のため課題や発表を積極的に取り入れる。</p>	<p>A…80%以上の生徒が授業を肯定的に評価している。</p> <p>B…60%以上の生徒が授業を肯定的に評価している。</p> <p>C…50%以上の生徒が授業を肯定的に評価している。</p>	<p>○単元別テストを生徒の状況に合わせて細かく設定して、取り組みやすい環境にした。</p> <p>○タブレットを使い、授業中の説明だけでなく、質問・提出物確認のため、積極的に活用した。オンライン授業のときも丁寧な対応ができた。</p> <p>○生徒間で話し合いをさせたり、生徒の解答をお互い見ることができるようにして、解答方法や各自の意見を共有した。</p>	A	<p>○単元別テスト・再チャレンジテストに向けて、通常の授業内容の向上に努めた。</p> <p>○常勤教諭、非常勤教諭関係なく、タブレットを効果的に活用した。昨年同様、出勤しない日もあるため、タブレットを通じて、前もって課題を配信したり、後日、フォローした。</p> <p>○生徒同士で、解答を確認させ、お互いの意見や考えを共有できた。数学的にBESTな解答を確認した。</p>	林武
	② 基礎力・応用力の育成	<p>○日々演習にきちんと取り組むよう指導し、高い提出率の維持に努める。</p> <p>○単元別テスト後の再チャレンジを徹底することで、基礎学力の向上を図る。</p> <p>○過去問などの演習を行って、入試に対応できる応用力を身に付けさせる。</p>	<p>A…80%以上の生徒が目標を達成できている</p> <p>B…60%以上の生徒が目標を達成できている</p> <p>C…50%以上の生徒が目標を達成できている</p>	<p>○未提出者への声掛け、提出者の内容の確認などまめに行なった。</p> <p>○再チャレンジに向けて、質問の時間を用意し、より確実に理解できるようにした。</p> <p>○演習の時間は、過去問等が載っているテキストを使用し、指導・解説した。教科書の内容を終わらせることに時間を足られてしまい、十分な演習ができない単元もあった。</p>	B	<p>○未提出者には、週担当・個人担当の教員を通じて声掛けをした。また、提出物の内容確認も徹底して、達成できていない生徒には対応した。</p> <p>○放課後の時間が確保できず、成績下位者への指導はもう少し工夫が必要だった。</p> <p>○教科書の内容を徹底することに時間を使ってしまい、演習部分が不十分であった。次年度はこの点を改善していきたい。模試の事前対策授業も継続していきたい。</p>	

梅光学院中学校・高等学校 部門評価シート 2022年度（教科）

学校評価における部門評価

教科	重点目標	具体的方策	達成基準	最終評価	達成度	達成状況の診断・分析	責任者
理科	① 自然の物事・現象を論理的に説明できるようになる	<p>○基礎学力の向上と、主体的な学びができるようになるために、予習と復習を習慣付けられる課題を配布する。</p> <p>○生徒自らが疑問を持ち、実験により、解き明かしていく過程を学び、実験手法やその結果をもとに、自然の事物や現象を質的・量的な関係や時間的・空間的な関係から説明できるように授業を工夫する。</p>	<p>A…80%以上の生徒が目標を達成できている</p> <p>B…60%以上の生徒が目標を達成できている</p> <p>C…50%以上の生徒が目標を達成できている</p>	<p>○宿題等は極力減らし、毎回5分間程度の小テストを行うことで、主体的な学習を促した。ほとんどの生徒は回を重ねるごとに良い点を取ることができるようになった。しかし、年度の後半になるにしたがって点数の上昇度は小さくなっていった。</p> <p>○授業内の実験や観察および探究的な活動および発表の割合を増やした。発表後のフィードバックによって論理的説明について考えられるよう指導した。その結果、フィードバックで指摘されいような発表を意識してつくるようになった。</p>	A	<p>○小テストに関しては、年度の後半にかけてモチベーションが低下したと思われる。毎回の小テストで、テストに特別感がなくなり、慣れてしまったものと思われる。次年度は少しずつ変化を加える必要があると考えられる。</p> <p>○1回きりの実験でなく、継続的に行う探究活動では、発表を改善する機会が与えられるので、よりよい改善がみられたと思われる。</p>	西尾潤
	② 自然の事物・現象を科学的に探究するための資質・能力を身につける	<p>○生徒に「探究の方法」を習得させるために、自然の現象から疑問を見出し、仮説を立てて検証する「探究」のプロセスを授業へ積極的に盛り込む。</p> <p>○自然の事物・現象に対する概念や原理・法則の理解を図るために、観察や実験を行い、得られた結果を比較したり、関連付けたりできるよう、授業をデザインする。</p>	<p>A…80%以上の生徒が目標を達成できている</p> <p>B…60%以上の生徒が目標を達成できている</p> <p>C…50%以上の生徒が目標を達成できている</p>	<p>○生徒が身近な事象に疑問点を見出し、仮説を立て、実験を行う姿勢を身につける授業を意識して行った。しかし、講義型の授業で行った知識が、実験や探究活動になると発揮されないことが散見された。</p> <p>○実験や探究活動の結果について発表する活動を増やした。文字や写真のみの発表から数値を産出し、表やグラフにして伝えることの重要性を強調して指導した。発表を重ねるにしたがって、表やグラフを用いた発表が増えた。</p>	B	<p>○講義型の授業で得た知識はそのまま実験や探究活動において使えるようにはならず、実際に使えるようになるためには、さらなる指導が必要であると考えられる。</p> <p>○表やグラフを用いた説明の伝えやすさやわかりやすさを理解していったと思われる。一貫した方針で継続して指導する必要があると考えられる。</p>	

梅光学院中学校・高等学校 部門評価シート 2022年度（教科）

学校評価における部門評価

教科	重点目標	具体的方策	達成基準	最終評価	達成度	達成状況の診断・分析	責任者
保健 体育	① 積極的に運動に親しむ資質や能力の育成	<p>○個人の授業記録により、自身の成長や能力を客観視させ、達成感や満足感に繋げる。</p> <p>○グループワークを通して、主体的・対話的な深い学びを身に付ける。</p> <p>○iPad等のICT機器を活用した協働的な学習</p>	<p>A 80%以上の生徒が目標を達成できている。</p> <p>B 60%以上の生徒が目標を達成できている。</p> <p>C 50%以上の生徒が目標を達成できているとは言えない。</p>	<p>○各種目でipadを用いて自身の動作の確認や記録を行い、課題発見や問題解決に役立てることができた。</p> <p>○またグループワークを通して自身の問題点を生徒同士で客観的に指摘し合えるなど、技術の向上にとっても非常に効果的であった。</p> <p>○見本となる動作はyoutube等ですぐに動作確認をするなど、タイムレスに調べる習慣が身についた。</p> <p>○来年度は実技のデジタル教科書を導入予定なので、今まで以上にスムーズに見本の確認や活発な意見交換が期待できる。</p>	A	<p>○iPadで自身の動作を撮影し数値を記録することで成長が実感でき、更なる学習意欲の向上に繋がった。</p> <p>○グループワークでは自身の映像や記録を客観視できるだけでなく、クラスメイトの記録向上に向けた改善策の提案や健康状態の気づきなど、深い学びに繋がった。</p> <p>○今後は教科を横断した学びや、スポーツの動作や知識の日常生活での応用など更なる深い学びを実践していきたい。</p>	森田 裕介
	② 生涯を通じて継続的に運動ができる資質や能力を育てる。	<p>○グループ活動の主体的・対話的な活動の中で集団で体を動かすことの楽しさを学ぶ。</p> <p>○授業中の大会運営はもちろん、体育祭、クラスマッチ、スポーツ大会等の企画・運営に関わる中で、実践するだけではない、スポーツの楽しさを学ぶ。</p>	<p>A 80%以上の生徒が目標を達成できている。</p> <p>B 60%以上の生徒が目標を達成できている。</p> <p>C 50%以上の生徒が目標を達成できているとは言えない。</p>	<p>○iPadやプロジェクターを活用して、子ども同士で活発な意見交換が行われるなど、技術の向上だけでなく、コミュニケーションの一つの手段としてICT機器は非常に効果的であった。</p> <p>○授業の中でのミニスポーツ大会や体育祭、クラスマッチを通して、運動するだけではないスポーツの楽しみ方、関わり方を学ぶことができた。</p>	B	<p>○運動が苦手な生徒でもICT機器を活用することで主体的・対話的な活動を活性化することができた。</p> <p>○また試合観戦や大会運営等を通して、運動すること以外でスポーツへ楽しく関わる能力や資質を育むことができた。</p> <p>○今後はスキー研修やゴルフ・アルティメットを導入するなど、一つでも多くの生涯スポーツに触れられるように授業やカリキュラムの工夫を行っていく。</p>	

梅光学院中学校・高等学校 部門評価シート 2022年度（教科）

学校評価における部門評価

教科	重点目標	具体的方策	達成基準	最終評価	達成度	達成状況の診断・分析	責任者
音楽	① 主体的な音楽活動を通し、音楽を愛好する心情を育てる。	○基本的な音楽知識の習得。 （単元別テストによる、ペーパー、実技テストの実施。）○主体的に歌唱・器楽をしようとする態度の育成。○鑑賞（今年度から整備された大型スクリーンやICT機器を活かして、クラシックからポピュラー音楽、ジャズや映画音楽まで幅広い音楽鑑賞を通して生涯に渡って音楽を愛する心を育む・○ワークシートの活用	A 80%以上の生徒が目標を達成できている。 B 60%以上の生徒が目標を達成できている。 C 50%以上の生徒が目標を達成できている。	○生徒の実情にも配慮した細やかな単元別テストの実施により、ペーパーテスト、歌唱等実技テストにおいて、主体的な生徒の取り組み学びに繋がった。○タブレット等ICTの活用により、実技の課題録音などを通して指導が出来ることで、より生徒一人一人と繋がることができ、細かい個別指導ができた。○定期演奏会や卒業演奏会では、PowerPoint作成、演奏とスクリーンを融合させた新しい発表の形で、演奏するもの、鑑賞するものとの一体感をより持つことができ、豊かな音楽活動の共有に繋がった。	A	○単元別テストによるペーパーテスト、実技テスト共に、多くの生徒の点数が前年度より工場してきている。意欲的に鑑賞や実技、毎回の学習態度の変化が見られ、クラシックや教科書の音楽作品にも興味を示し、生徒から興味を持って質問を受けるようになった。○音楽科の演奏会活動や朝の礼拝での奏楽の活動等を通して、教科のみならず、クラスとしての学びがあったことも大きい。授業ではコロナ禍でも、声楽を中心とした歌唱指導、梅光ヴィジョンの「ハンドベルに全員が演奏に触れる事」、新たなピアノ実技の導入等の演奏実技、また鑑賞指導の充実を図ることができた。	大森道子
	② 主体的な音楽活動を通し音楽活動で豊かな感性を育む。さらに専門性を高め、将来の音楽活動の礎を作り上げる。	○基本的な音楽知識の習得。 ○演奏活動を中心にした授業。 （今年度から歌唱、ハンドベル演奏に加えて、普通科の音楽授業においても、ピアノ実技レッスンを取り入れる新たな取り組み。より主体的に目標をもって練習することや、仲間やクラスで共に音楽を高めていこうとする姿勢の育成（今年度から電子ピアノの導入、中学生は一人1台、多いクラスでも2人で1台を用いて）○入試問題への取り組み。	A 80%以上の生徒が目標を達成できている。 B 60%以上の生徒が目標を達成できている。 C 50%以上の生徒が目標を達成できている。	○音楽科においては、授業での実技レッスンの方法やアンサンブルではそれぞれの楽器を生かし、演奏会の為だけでなく日頃からの力をつけていくことなど、前年度に様々な課題が取り上げられていたが、今年度は放課後に練習室に残って、練習して帰る生徒が増えたことで、お互いに良い刺激を受けながら継続的に努力する生徒の取り組みにより、レベルアップの一因となった。○歌唱、ハンドベルに加えて、電子ピアノの導入により、ピアノ実技のスタートを切ることができた。初心者グループと経験者グループとのアンサンブル等、ピアノ実技に関してはこれからもっと生徒の実態に合わせて取り組みの工夫を重ねていくことが大切だと感じている。○生徒の進路や実態に合わせた入試問題の取り組みに努め、結果を出すことができた。	A	音楽科の定期演奏会や卒業演奏会では、スライドを使った曲紹介、それまでの音楽科中心とした行事から、学校行事としてより生徒一人一人が目標をもって取り組めたことが大きかった。聴衆である生徒たちの、自主的な鑑賞活動に繋がったこともよかった。○高3生においては、高い目標設定を持ち入試問題や課題に取り組めた。○音楽科全体においても、単元テストによりさらに深く内容を進められ、多くの生徒が回を重ねるごとに、良い点数を取ることが出来、学習意欲の向上、変化を感じた。	

梅光学院中学校・高等学校 部門評価シート 2022年度（教科）

学校評価における部門評価

教科		重点目標	具体的方策	達成基準	最終評価	達成度	達成状況の診断・分析	責任者
美術	①	○美術の創造活動の喜びを味わう。（中学）	○各学年の作品制作を通じて、丁寧さと根気強さと完成する喜びを体験する。	各学年の作品が期限内に完成した作品が、 A：9割以上の提出 B：7割以上の提出 C：7割未満の提出となる。	各学年ともに、熱心に作品製作に取り組んだ。また、欠席の多い生徒については、各個人担当と連絡を取り合って取り組ませようとした。完成した作品は、オンラインで保護者の方が閲覧できるように工夫した。	B	各学年ともに、熱心に作品製作に取り組んだ。不登校気味の生徒の作品製作については、工夫が必要であると感じた。	林 武
	②	○ICTを活用した美術活動を体験する。（中学校）	○タブレットを活用して、作品提出させたり、お互いの作品を鑑賞する。 ○美的感覚や価値観を日常生活の中で、主体的に表現できる。	アンケート等を通して、将来にわたり美術を愛好する心情を育てることが A：目標以上の成果を上げた。 B：目標に見合う成果を上げた。 C：目標に見合う成果に及ばなかった。	オンライン授業のときも家庭でできる課題を設定し、タブレットを活用して取り組ませた。製作時間の多い学期に向けて、進捗状況と照らし合わせ、教材の選定をし直した。	A	作品に対して、主体的な作業を重視し、他の生徒と関わりあいながら作業を進めていくのではなく、自分と見つめあいながら仕上げる体験を意識させた。	

梅光学院中学校・高等学校 部門評価シート 2022年度（教科）

学校評価における部門評価

教科	重点目標	具体的方策	達成基準	最終評価	達成度	達成状況の診断・分析	責任者
英語	① 4技能5領域のスキル向上 (これに加え高3においては 模擬試験の成績向上に努める)	○教科書外の活動として、授業内外で以下のことを行う。 ・多読(Xreading) ・多聴(English Central) ・語彙(Quizlet) ・発話・会話を記録する ・Key sentences(中学) ・プレゼンテーション(主に高校) ○模擬試験における英語の成績向上を目指した学習を行う(高3)	A…80%以上の生徒が目標を達成できている B…60%以上の生徒が目標を達成できている C…50%以上の生徒が目標を達成できている	コミュ英語と英表の授業の分担の違いから、コミュ英ではすべての活動に取り組み、英表では主にプレゼンテーションやライティングの活動を行った。前年度以前も取り組んでいたX ReadingやQuizletは定期的に取り組むことができ、特に英語学習へのモチベーションの高い生徒が自主学习の一環として取り入れることができたが、今年度から試験的に始めたEnglish Centralのサービスは教員の活用能力不足もあり授業内外において積極的に活用することができなかった。 また、高3への模試対策は時間を確保することが難しく、なかなか行うことができなかった。高1・2に対する模試対策は年に2回行うことができた。	B	主にコミュ英で取り組むべき活動が目標として挙がっており、英表における目標が明確ではないため、来年度はどちらの授業でも取り組めるような活動指針を決める必要がある。 また、各授業の目標の軸・向上させるべき能力をより明確化し、役割を分けることでより集中的で効率の良い授業展開をしていく必要がある。 さらに、模試だけでなく、外部の英語に関する資格取得やスピーチコンテスト参加なども積極的に取り組んでいきたい。	只木 徹
	② ICTを活用することによる英語学習への意欲向上・日常的に英語に触れる機会の確保	○Quizletを活用し語彙学習を行う ○Weblio英会話を通じて日本語が母語でない英語話者と英語で会話する楽しさを知る ○X ReadingやEnglish Centralなどを自主学习にも取り入れる ○上記のものに加え、その他のICTソフト、プログラムなども用いて、より効率的・効果的な英語学習ができるよう努める	A…80%以上の生徒が目標を達成できている B…60%以上の生徒が目標を達成できている C…50%以上の生徒が目標を達成できている	ほとんどの授業において、単元別テストや単語テスト以外の活動では、ICTを活用することができた。ロイロノートをはじめ、目標にあがっているような様々なソフト・アプリを使うことができた。今年度より、高校ではデジタルワークブックを利用し始めた。 しかし、調べ学習などをする中で授業とは関係のないものを見ている生徒も多々見られたため、ICTの活用の方法は見直すべき部分もあると考えられる。	B	現在、ロイロノートやX Reading、Quizletなどを使うに留まってしまっている。より生徒がICTを使いこなせるように指導していき、自主学习にも取り入れてもらえるようにしていきたい。	



梅光学院中学校・高等学校 部門評価シート 2022年度（教科）

学校評価における部門評価

教科	重点目標	具体的方策	達成基準	最終評価	達成度	達成状況の診断・分析	責任者
技術・家庭	① 実践的な授業の充実	<ul style="list-style-type: none"> <li>○基礎的知識・技術の定着</li> <li>○ICT機器を活用した教材の工夫</li> <li>○実習を通じて危機管理能力やコミュニケーション能力を身につけさせる</li> </ul>	<p>A：80%以上の生徒が目標を達成できている。</p> <p>B：60%以上の生徒が目標を達成できている。</p> <p>C：50%以上の生徒が目標を達成できているとは言えない。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ICT機器や、アプリを活用し、家庭科の基礎知識を身に付けることができた。</li> <li>○ペーパーレスを意識し、さらなるICTの活用を模索した。単元別テストもタブレットを使って実践してみた。</li> <li>○オンライン授業では、家庭の様子を題材とした授業を企画した。</li> </ul>	A	オンライン授業では、家庭でも取り組める内容の課題を与え、「食」という面から家庭での役割を意識を持たせた。このような活動を通じて、家族とのコミュニケーションにもつながることができた。	林武
	② SDGsなどを意識し、環境に配慮した家庭教育の実践	<ul style="list-style-type: none"> <li>○家庭菜園できるように、木材を活用したプランターづくりをする。</li> <li>○破れてもすぐ新しものを購入するのではなく、自らの手で、修繕できる裁縫の技術を身に付ける。</li> </ul>	<p>A：80%以上の生徒が目標を達成できている。</p> <p>B：60%以上の生徒が目標を達成できている。</p> <p>C：50%以上の生徒が目標を達成できているとは言えない。</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○体験授業をさせ、ものづくりの楽しさを味わうことができた。</li> <li>○感染症対策をしながら、調理実習も実践した。食材を無駄なく使うことにも配慮した。</li> </ul>	B	コロナ禍ではあったが、感染対策を十分にしながら調理実習を実施した。季節を意識したメニュー（クリスマス時期にブッシュドノエル）を設定することで、「食」に対する興味を持たせた。また、中1では、賛美歌カバーを作成し、学校生活で使用する教材を大切にすることと裁縫技術を学習した。次年度は、地域の特性を生かしたような調理実習とさらなる技術向上に努めたい。	

梅光学院中学校・高等学校 部門評価シート 2022年度（教科）

学校評価における部門評価

教科	重点目標	具体的方策	達成基準	最終評価	達成度	達成状況の診断・分析	責任者
情報	① 情報モラル教育の充実	<p>○ニュースなど身近な話題で情報モラルに関係したものがあれば、随時生徒に提供していく。</p> <p>○生徒同士の話し合いを通して、情報モラルについての理解を深めさせる。</p>	<p>A 80%以上の生徒が目標を達成できている。</p> <p>B 60%以上の生徒が目標を達成できている。</p> <p>C 50%以上の生徒が目標を達成できているとは言えない。</p>	<p>○SNSの安易な投稿による炎上事件やいじめなどのタイムリーな題材や、情報モラル教室での下関警察による身近な事件を用いて情報モラル教育の充実を図った。</p> <p>○ワークシートやグループワークを通して情報モラルに関して理解を深めようと試みたが、活発な意見交換までには至らなかった。</p>	B	<p>○情報モラルに関して多くの生徒は正しい知識をもって行動に移せているが、全員に十分に伝わっているとは言い難い。</p> <p>○来年度はさらに本校の現状と課題に即した内容の授業や研修を実施していく。</p>	森田 裕介
	② プログラミングやシミュレーションによって問題を発見・解決する活動を通して、問題解決にコンピュータを積極的に活用しようとする態度、結果を振り返って改善しようとする態度、生活の中で使われているプログラムを見いだして改善することなどを通じて情報社会に主体的に参画しようとする。	<p>○中学校までの成果を踏まえ、アルゴリズムをフローチャート等で表現する方法を理解できるようにする。</p> <p>○関数及び配列について理解するとともに、身近な関数を作成し、身の回りの簡単な問題についてコンピュータを活用する。</p> <p>○身近な問題を発見するとともに、解決に向けてのアルゴリズムやモデル化を考え、プログラミングやシミュレーションなどを用いて問題を解決する。</p>	<p>A 80%以上の生徒が目標を達成できている。</p> <p>B 60%以上の生徒が目標を達成できている。</p> <p>C 50%以上の生徒が目標を達成できているとは言えない。</p>	<p>○提示された課題を解決するためのWEBサイトを制作し、また人口減少や人件費削減のための解決策として、プログラミングを用いて自動会計AIレジを制作するなど、プログラムのしくみを学んだ。</p> <p>○データ分析ではExcelを用いて、フードロスをなくすための未来の販売数予測を行うなど、身近な問題をコンピュータを活用して問題解決を図った。</p>	A	<p>○今年度より教科書の内容が大きく変わりプログラミングなど新しい分野も増え難化したことで、授業の生徒の反応に不安があったが、プログラミング教材を活用することで、子どもたちの積極的な授業参加が見受けられた。</p> <p>○来年度は大学入学共通テストを見据えて、さらに授業や単元テストを工夫していく必要がある。</p>	

梅光学院中学校・高等学校 部門評価シート 2022年度（教科）

学校評価における部門評価

教科	重点目標	具体的方策	達成基準	最終評価	達成度	達成状況の診断・分析	責任者
宗教	① 福音を聞くこと、知ること、信じること。神と自分と他者と、神の造られた被造物(自然や動物)を愛し仕える生き方(キリスト教精神、普遍的価値である人権や平等や博愛)を身に着けること。	歴史にわたって人々を励ましてきた旧約聖書・新約聖書テキストから、キリスト教の英知を学ぶ。現代の諸問題を取り扱い、いかに考え、いかに生きるか、アクティブラーニングを通して、生徒同士が学び合う。	A 80%以上の生徒が目標を達成できている。 B 60%以上の生徒が目標を達成できている。 C 50%以上の生徒が目標を達成できている。	本年は、「格差と貧困」に焦点を当てて学んだ。世界における不平等格差や時事問題を見つめ、聖書の時代にもあった貧と富、格差に対して、聖書のメッセージを、生徒たちがグループワークと発表を通して相互に学んだ。6学年の縦割り班となるため、一つのグループに様々な学年が一緒となり、後輩は先輩から学び、先輩は後輩を教え、良き交流の時でもある。そのため低学年であっても、プレゼン能力がとて高くなっている。	A	授業の作品の中で良いものは、もっと他の機会にも発表の機会を与えたい。	後藤 献一
	② 聖書、キリスト教文化を理解し経験すること。	学内外のキリスト教行事、地元教会の礼拝に出席し、信仰生活を中高生のうちに体験する。そのフィールドレポートを提出する。継続して参加するよう勧める。礼拝において主体的に参加し、奉仕をする。ボランティア活動を経験する。	A 80%以上の生徒が目標を達成できている。 B 60%以上の生徒が目標を達成できている。 C 50%以上の生徒が目標を達成できている。	学院内で毎日礼拝の時を持っているが、学外のリアルな教会を体験することを願っている。ほとんどの生徒がこのレポートを提出している。また平日でも行きやすいように、学内のBCC(Baiko Community Chapel)やバイブルリトリートにも、多くの生徒が参加している。	A	行った先で、もっと奉仕活動に関われるように促していく。	

梅光学院中学校・高等学校 部門評価シート 2022年度（教科）

学校評価における部門評価

教科	重点目標	具体的方策	達成基準	最終評価	達成度	達成状況の診断・分析	責任者
ドラマ	① 自分の資質を発見し、それをより豊かに広げる	○ドラマエデュケーションの基本的なエクササイズを通じて自分の資質と向き合う。 ○毎回の「ふりかえりシート」で自分の中の感情の動きを言語化する。	A 80%以上の生徒が目標を達成できている。 B 60%以上の生徒が目標を達成できている。 C 50%以上の生徒が目標を達成できている。	○各種のエクササイズを通して、楽しみながら、段階を踏んで「自己発見」をすることで、自分の得意なこと、苦手な事などを発見し、言語化できるようになった。	A	○来年度も、引き続き、ドラマで「体験」したことを日常生活にどう役立てていくかの筋道を、生徒自身が発見できるように、授業外や、他教科と連携した展開を探っていく	大塚恵美子
	② 自分と違う「他者」を意識し、コミュニケーション、プレゼンテーション力を向上させる	○「コミュニケーション」「リーダーシップとフォロワーシップ」をキーワードにして、クラスの特性に沿ったプログラムを組む。 ○「短い作品創作とクラス内発表」を繰り返すことで、自分と違う「他者」と協力して一つの物事を成す経験を積む。	A 80%以上の生徒が目標を達成できている。 B 60%以上の生徒が目標を達成できている。 C 50%以上の生徒が目標を達成できている。	○「演劇祭」では、どのクラスもグレードの高い作品を創作することができた。また、普段目立たない生徒がリーダーシップを発揮するなど、生徒同士が新しい発見をすることができた。 ○オープンスクールや保護者会で、プレゼンをする希望者も増え、「誰からに何かを伝える」喜びを知る生徒が増えた。	B	○来年度も、引き続き、授業内で発見した「他者との違い」を学校生活における友人関係などの問題解決につなげることができるよう、臨機応変にプログラムを変更しつつ、声掛けを行っていく。	

学校評価における部門評価								
学年		重点目標	具体的方策	達成基準	最終評価	達成度	達成状況の診断・分析	責任者
中学校	①	生活と学習の場としてのコミュニティを作る（支え合う学級、学年、中学となる）	<ul style="list-style-type: none"> <li>○生徒会（委員会）活動を通して生徒主体の学校を作る。</li> <li>○「全員担任制」によって学校全体で生徒一人ひとりをケアする。欠席者への対応は、事務室とも連携する。</li> <li>○「全員担任制」によって一人ひとりの生徒の情報を全校で把握する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>A 支え合う学級、学年、中学校が達成している</li> <li>B 概ね達成しているが一部達成できていない</li> <li>C 多くの場面で達成できていない</li> </ul>	生徒会活動については堅調であったが、高等学校主導という形が続いている。全員担任制は中学教員グループが互いによく相談し合っ、生徒の情報を共有した。また、管理職との連携もスムーズで、学校全体で生徒一人一人をケアする体制が出来上がりつつある。生徒会の活動は非常に活発とは言えないが、TS・MSの連携や管理職との連携もうまく取れており、支え合う学級、学年、中学校が作られている。	A	中学生の生徒会が主導する行事なり、活動を開発していくことが必要かもしれない。6年間一貫の学校では、リーダーシップはどうしても高校生になってしまう傾向がある。全員担任制はうまく機能している。単独のTSが単独の学級を担当することへの憧れは教師なら誰しも持つものかもしれないが、そこを学校全体で面倒を見る、という方針に理解を示して協力してくれている。	只木 徹
	②	学習習慣の確立	<ul style="list-style-type: none"> <li>○単元別テストによって日頃から学習する習慣をつける。また、カレンダー機能を活用して、勉強のスケジュールを把握しやすくする。</li> <li>○全員担任制により個々人のニーズを把握し学習意欲につなげる。</li> <li>○留学など学校のプログラムを通して学習意欲を引き出す。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>A 大多数の生徒がこの目標を達成している</li> <li>B 概ね達成しているがまだ達成できていない生徒が一部に存在する</li> <li>C 多くの生徒が達成できていない</li> </ul>	各教科とも単元別テストは完全に定着している。カレンダー機能をうまく使っている生徒が大半とは言えないが、日頃からの学習の習慣は、半単元別テストによって強制的にも促進されている。全員担任制により、教員が互いに情報を交換し、生徒の細かなケアが実現している。1月～2月について実施できたシンガポールでの全員留学の満足度は非常に高く、これがきっかけとなって、学習意欲が湧いた生徒もいるし、またクラスの間関係等に多くのプラスの効果があった。	A	カレンダーによるスケジュール管理に課題を残している。このことをもっと徹底して、中1から習慣化していくことが肝要と思われる。全員担任制は、これをTS間で仲立ちする存在が重要で、現在は積極的にTS間のコミュニケーションを活発にしていく触媒の存在のTSが多い。全員留学の意義は大きい。今回都会のシンガポールで3学年一緒だったことにより、通常の留学では考えられない環境となり、そのことも良い方に（学年を超えた交流）働いた。	

学校評価における部門評価								
学年		重点目標	具体的方策	達成基準	最終評価	達成度	達成状況の診断・分析	責任者
高等学校	①	自立した学習習慣の確立	<ul style="list-style-type: none"> <li>○単元別テストによって日頃から学習する習慣をつける</li> <li>○全員担任制により個々人のニーズを把握し学習意欲につなげる</li> <li>○留学など学校のプログラムを通して学習意欲を引き出す</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>A 大多数の生徒がこの目標を達成している</li> <li>B 概ね達成しているがまだ達成できていない生徒が一部に存在する</li> <li>C 多くの生徒が達成できていない</li> </ul>	<p>単元別テストは実施3年目で生徒・教員ともに慣れてきており、学習習慣が身につけてきた生徒も増えてきている。全員担任制についてはチューターと生徒の密な関係が今後の課題。留学に関してはいろんなトラブルを乗り越えながら無事成長し、帰国することができた。</p>	B	<p>単元別テスト、全員担任制のシステムについては、まだまだ改善の余地がある。</p> <p>宿題、テストなどの教員間の情報共有を今以上に密にする必要がある。</p> <p>全員担任制に関しては二者面談実施回数を増やし実施するなど、生徒のニーズや資質を引き出せるようなコミュニケーションの場を設ける必要がある。それは教員の資質のみにゆだねるのではなく、仕組化していくことが重要である。</p>	重村雄太
	②	自己の進路について考え、進路目標に基づいて学校生活を設計する	<ul style="list-style-type: none"> <li>○進路を考えるプログラムを行う</li> <li>○模擬試験の利用とその振り返りの機会を設ける</li> <li>○高大連携プログラムを進路指導に結びつける</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>A 大多数の生徒がこの目標を達成している</li> <li>B 概ね達成しているがまだ達成していない生徒が一部に存在している</li> <li>C 多くの生徒が達成できていない</li> </ul>	<p>いずれも滞りなく実現することができた。</p> <p>高大連携に関しては入試における志望理由書などや面接などで活用し、合格する生徒たちも以前に比べて増加した。</p>	A	<p>進路プログラム、模擬試験、高大連携に関しては一定の型が出来上がり、確実に実施できている。現状に満足することなく、型に修正を加え、次年度につなげていく必要がある。今後の課題としては中学段階からの準備ができるようにプログラムを再構成・再構築していく必要がある。</p>	